

第二回國際ダルマキールティ會議

Second International Dharmakirti Conference

岩 田 孝

インドの哲學は、人間の思惟の及ぶ限りと言っても過言ではないほど多種多様な思考型を内含する思想の宝庫である。その一端は漢譯佛典を介して中國・日本にも傳えられてきた。しかし、漢譯されなかった爲に近年に至るまで紹介されることのなかった文獻も少なくない。特にインド佛教の文獻に関しては、多くの Sanskrit 原典が散佚しており、Sanskrit 文獻の代りに西藏譯の文獻を用いて研究することを餘儀なくさせられている。筆者の専攻する後期大乘佛教の論理學と認識論の領域においてもこのことは例外ではなく、まず、基本となる原典を整えることが急務となっている。幸いに、1930年代に R. Sāṅkṛtyāyana がネパールで諸寫本を發見して以來、この領域の研究にも燈が點されるようになり、これら發見された諸文獻の解讀と、チベット論理學・認識論の研究の進歩とによって、これまで暗中摸索の状態であった七世紀以降のインド佛教思想史を解明することが可能な状況になってきた。後期大乘佛教は、宗教論・認識論・存在論・論理學等に關する緻密な思索を多彩に含み、その研究に従事する諸學者を魅了しつつあるが、その内容の深淵なるが故に、未だ総合的に研究する段階までに至っていない。現在のところ、各國の學者が一部分を取り擧げて個々に研究するという形で徐々に解讀が進められているのみである。各學者がそれぞれの異なった分析方法や異なった解釋を通して研究成果を發表するものの、それらの相違につき議論し、相互に理解し合う場がこれまでほとんど設けられていなかった。そこで佛教大學の梶山教授やウィーン大學の Steinkellner 教授が中心となって、七世紀中葉の佛教學者である法稱 (Dharmakīrti) の思想についてのこれまでの研究の紹介を目的として、第一回國際ダルマキールティ會議が1982年に京都において開催された。これを契機に、法稱

及びその前後の佛教の學匠の思想を中心とした後期大乘佛教の研究が一段と進み、それと共に各國の研究者間の交流も盛んに行われるようになった。これらの研究成果の集成を目的として開催されたのが今回の第二回目の會議である。

この國際會議の特色は、焦點の絞られたテーマ——法稱の思想とその周邊——を、四日間かけて研究討論するという點にある。それが可能となったのは、参加者の大部分が研究領域を共通にしていたので、全員が、部會に分かれることなく、常に同一の會議場に集まることができたからである。また、午前と午後のコーヒープレイクを導入したことも討論の場を提供するという意味で効果的であった。発表内容について、発表の直後に、発表者と意見を交換することができる貴重な時間であったからである。筆者にとっても、歐米の學者の思考方法を知る機会となったのがこの場である。例えば、トロント大學の Gillon 教授は、Sanskrit 文での語順がどの程度まで交換可能かという問題意識のもとに、Staal 教授の提唱した語順交換規則を部分的に修正した規則を考案し、それが法稱の著作の散文例においてかなり成立することを證示した。その証明の若干のポイントについて質問した所、詳しい説明を聞くことができ、啓發される所が大であった。更に、このコーヒープレイクの間に議論が終らない場合には、晝食後の休憩時間に有志が集まることもあった。法稱の論理學說において主要な考え方である「包攝關係の成立根據としての本質的結合關係 (svabhāvapratibandha)」を如何に解すべきかという問題——それは物の世界にあるのか、それとも概念の世界にあるのか、或いはその兩方にあるのかという問題等——につき、研究発表において種々の意見が提出された。そこで午後の休憩時間に、Steinkellner 教授・桂教授などと共に庭園の小蔭に座して、諸見解の同異を検討し、また、それぞれの解釋を述べ合った。この二時間ほどの討論は、その質において會議の一日分に相當すると思えるほどであった。

會議の内容すべてを報告する紙面の餘裕はないので、その概略を以下に記することにしたい。會議は、ウィーン大學の Steinkellner 教授が會長 (president) となり、オーストリア科學アカデミーの後援により1989年6月11日から16日にかけて開催された。参加者は約70名、参加國は15ヶ國ほどである。會議

場となったウィーン郊外の Schloß Neuwaldegg は、16世紀に建られた城を研修施設に改築したもので、英國風の庭園を見下ろす大會議室は、文化の都 Wien に相應しく、壁畫やシャンデリアに飾られていた。

研究發表は12日から四日間行われた。第一日目は、法稱の認識論, *pramāṇa* (妥當認識／妥當認識根據) の定義などについての研究發表があり、午後、オーストリア科學アカデミー主催のレセプションが開かれた。その席上で、親日家のメンゲ(Menges)教授と御一緒させていただいた。言語學者としての教授の廣汎な知識に魅せられて、どれ程の語學を修得されたのかを聞いた所、いとも簡単に“some dozens”(數十)と答えられたのが今でも強烈な印象として残っている。同席された長崎教授、森山助教授と共に、西歐の學者の言語學の層の深さに驚歎した次第である。二日目は、論理學が中心で、推論を成立させる論證因の種類、論證因と歸結との包攝關係、包攝關係の成立根據、また、疑似主張命題についての説の歴史的變遷——*Dignāga* の疑似主張命題についての解釋を法稱が *Pramāṇavārttika* で援用し、後に、*Hetubindu* で否定するという變遷——などについての研究が發表された。否定的包攝關係について發表する豫定であった Matilal 教授が怪我の爲に出席されなかったのは残念であった。後半の三日目・四日目には、法稱の哲學的背景を中心に發表があり、法稱と中觀派や *Nyāya* 學派との關連についての論文も發表された。更に、法稱の利那滅説の論據となる *arthakriyā* (効果的作用／目的の成就) の歴史的背景として *Naiyāyika* の用いた *arthakriyā* があること、しかし、後者が常住な存在を前提するので法稱の *arthakriyā* とは全く別な觀點から用いられていたことを指摘する發表もあった。また、本質的結合關係に關する諸々の解釋が提出されたが、それらを吟味し、統一的に把握することは今後の課題として残された。

研究發表の合間を利用して、日本・インド・歐米における現在の研究狀況の報告があった。これは、各國の學者が獨立に進めていた研究についての情報を得るといふ點で有益であった。今回の會議では、法稱の學説の解釋の問題については確定した定説を抽出するまでには至らなかったが、これまでの部分的な研究を將來の総合的な研究に組み込むという方向づけが所々に見えてきたとい

う意味で今回の會議は有意義であった。

以下は四日間の會議のプログラムである。

6月12日

9:00～ 9:20 會長開會辭 Ernst Steinkellner (Wien大學)

9:20～12:30 午前の部

議長 梶山雄一 (佛教大學)

1. D. SEYFORT RUEGG (Hamburg): The Significance of Dharmakīrti for the Tibetan dBu ma (Madhyamaka)
2. D. JACKSON (Hamburg): Previously Unrecognized Sources for the Study of Tibetan pramāṇa Traditions Preserved at the Bihar Research Society, Patna
3. B. S. GILLON (Tronto): Word Order in the svārthānumāna-Chapter of Dharmakīrti's Pramāṇavārttika
4. M. R. CHINCHORE (Poona): Dharmakīrti on Criteria of Knowledge

2:30～ 4:00 午後の部

議長 桂紹隆 (廣島大學)

5. C. LINDTNER (Copenhagen): The Initial Verses of the pramāṇasiddhi-Chapter in the Pramāṇavārttika
6. G. DREYFUS (Charlottesville): mKhas grub's Explanation of Dharmakīrti's pramāṇa-Definition

5:00～ 7:00 オーストリア科學アカデミー主催レセプション

6月13日

9:00～12:30 午前の部

議長 Lambert Schmithausen (ハンブルグ大學)

1. E. FRANCO (Bundoora): The Disjunction in pramāṇasiddhi

v. 5c

2. B. S. GILLON (Tronto): Inference and Metaphysics in the svārthānumāna-Chapter of Dharmakīrti's Pramāṇavārttika
3. T. IWATA (Tokyo): On the Classification of Three Kinds of Reason in Pramāṇaviniścaya III — Reduction of Reasons to svabhāvahetu and kāryahetu
4. M. INAMI (Hiroshima): On pakṣābhāsa
5. T. TANI (Kochi): Transformation from Hypothetical Negative Reasoning to Proper Proof — Dharmakīrti's Logical Standpoint of Selfdifferent/displacing Boundary Line as Time-ness of Momentary Existence

3:00～ 6:00 午後の部

議長 David Seyfort Ruegg (ハンブルグ大學)

6. C. OETKE (Hamburg): svabhāvapratibandha and the Types of Reasons in Dharmakīrti's Theory of Inference
7. T. TILLEMANS (Lausanne): Dharmakīrti on some Sophisms
8. M. MEYER (Warszawa): On the Date of the Tibetan Translation of the Pramāṇasamuccaya and the Pramāṇavārttika
9. E. Steinkellner (Wien): The Logic of the svabhāvahetu in Dharmakīrti's Vādanyāya

6月14日

9:00～12:30 午前の部

議長 岩田 孝 (早稲田大學)

1. F. OMAE (Fukuoka): Mīmāṃsā Theory of vedāpauruṣeyatva Criticized by Dharmakīrti and Śāntarakṣita
2. A. WAYMAN (New York): Dharmakīrti and the Yogācāra Theory of bīja
3. T. E. MEINDERSMA (Onnen): A Brief Section on apoha-

Theory in the paralokasiddhi-Part of Pramāṇavārttika II

4. S. KATSURA (Hiroshima): svabhāvapratibandha
3:00 第5回 Frauwallner 記念 Wien の森散策
5:00 ホイリゲ (Heuriger) にて夕食會

6月15日

9:00~12:30 午前の部

議長 Tilmann Vetter (ライデン大學)

1. K. SHUKLA (Gorakhpur): The Philosophical Background of Dharmakīrti's Works
2. B. SHASTRI (Gorakhpur): Dharmakīrti's Philosophical Position
3. K. KANO (Kyoto): On the Background of Pramāṇavārttika II v. 12ab
4. M. NAMAI (Koyasan): Two Aspects of paralokasādhana in the Dharmakīrtian Tradition
5. M. T. MUCH (Wien): Fragments from Dignāga?

3:00~ 6:00 午後の部

議長 Karin Preisendanz (ベルリン大學)

6. Y. KAJIYAMA (Kyoto): On the Authorship of the Upāya-hṛdaya
7. H. NAGASAKI (Kyoto): Perception in Pre-Dignāga Buddhist Texts
8. S. MORIYAMA (Kyoto): The Later Mādhyamika and Dharmakīrti
9. M. R. CHINCHORE (Poona): Post-Udayana Nyāya Reaction to Dharmakīrti's Vādanyāya — An Evaluation

6:00 閉會辭 梶山雄一 (佛教大學)

三日目の午後には、故フラウワルナー博士を偲んでウィーンの森の散策 (Spa-

ziergang)に出掛けた。久しぶりに見る森の緑は議論で飽和状態になった心・心所にとって最上の安らぎになったことは言うまでもない。終着点でのホイリゲ(郊外にあるワイン酒屋)では、ハンブルグ大學での恩師 Schmithausen 教授夫妻, Steinkellner 教授夫妻, Vetter 教授らと共に、チーズや焼きたてのパンなどの郷土料理に舌鼓を打ち、暫しの間言説の世界に遊ぶことができた。ワインの味、パンの香りが體全體に浸みわたっていった。ふと十年前のホイリゲでの経験を思い出した。新酒のワインを注文し、その甘い芳香につられて一氣に飲みほしたのであるが、店を出て數歩進むや否や、突然、秋のブドウ畑も、その中を行く小道も、すべて斜めに見え始めた。頭は將に *durcheinander* (雜亂)となっていた。後日、店の *Speisekarte* (メニュー)を見て納得した。それは、“*Sturm*”(嵐)という名のついたワインであったのである。今年の秋には再びその *Sturm* と對決ができそうである。